緑なす熱帯雨林の帯を越え巨鳥（ガルーダ）で飛ぶ赤道の空
谷岡亜紀

「ガルーダ」は神話に出てくる神鳥。また、インドネシアの航空会社名でもある。一首の意味は、ガルーダ航空の飛行機で赤道を越えて飛んでいる意味だが、鳥に乗って飛んでいるような、さらには、緑と赤、帯と道がひびき合って、不思議な雰囲気をかもしだしている。余談だが、私が六〇年代にインドネシアに行ったとき、木彫りのガルーダ像を買って帰ったのを思い出した。

テーブルにただ冷えていくコーヒーのような時間を飲み干して立つ
吉野美野里

不本意でしかも居心地の悪い時間を過ごさざるをえなかったしばらく。この歌のすぐ前に置かれた「攻められて返す言葉を見失い草花よりも無口となりぬ」という作と連続しているのかも知れない。時間を飲み干して、という表現によって、気持ちにある区切りをつけた意味が読める。

店先にならびゐる花に菊ふえてけふも訃報がわが家にとどく
間宮清夫

秋が深まってきて、急に知り合いに死ぬ人が増えたという意味を読んでいいだろう。菊が増えてきたことと訃報が増えたこととが、文脈上、因果関係があるように読めるところがこの作のポイント。直接には因果関係があるはずはないので、読者は「おやっ」と思わせられ挑発される。

短歌の現在

No.407　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

待ち人にあらずを待つも電飾の照り陰りつつ待つ人となる
岸並千珠子

おみくじに出てくる「待ち人」という語をそのままの意味で使って、不思議な感じを出している。文字どおりに訳すと、私は「待たれている人」を待っているわけではない。しかし、私は電飾にてらされたりしつつ待つ人となっている、の意味となる。待たれていると期待してはいない誰かを待っている。孤独な自己完結の世界の淋しさ。

柿を干し獅子柚子を挽ぐ夕暮の天より鶲の声がふりくる
住正代

秋の収穫時に昔ながらの収穫の行いをしていると、自然おのずからのいとなみにすっぽりと抱き取られる感じがする、というのだろう。上空で鳴くヒタキは、ここでは自然の運行のシンボルである。

丘越えて土踏みゆける牛舎（うしごや）に頭（かしら）打ちあひ餌を食む巨体
経塚朋子

「丘越えて……」とはじまる一首を冒頭から読み進んでいって、牛舎が見え牛が見え、牛に近づくまでの展開が楽しめる構成が見事。「頭（かしら）打ちあひ」も、うまい。

独身（ひとり）なることを告げれば呑水（とんすい）に盛り上げられる野菜のみどり
藤島秀憲

「呑水（とんすい）」は鍋料理をめいめいに取り分ける小鉢のこと。すなわち一首は、鍋料理を食べている場面。自分用に取ってもらった野菜を他人事のようにたんたんと表現して、